Atelier Emmanuel Barrois代表 エマニュエル・バロワ



ガラスの新たな可能性を開拓する

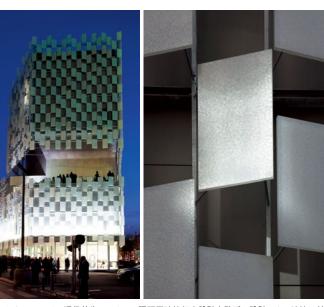
ジャン・ヌーベルや隈研吾など、世界的な建築家と協働するガラス製作工房 「AEB (Atelier Emmanuel Barrois)」。その代表を務めるエマニュエル・バロワ氏に、 設計者とのコラボレーションや、自身が考える「ガラス」の可能性について聞いた。

取材・文/浦田 薫(デザインジャーナリスト)

-- エマニュエル・バロワさんは、今春竣工 した隈研吾氏設計の FRAC マルセイユ(マル セイユ現代美術センター) の外壁ガラスを手 掛けられました。通常、どのように建築プロジェ クトにかかわっていくのでしょうか。

建築のプロジェクトでは、多くの場合チーム の一員として作業をします。建築家が意図す る考えに沿ってガラスのデザインや使用方法

を提案します。建材や素材への知識が高い建 築家でも、すべてを網羅することは不可能です。 そこで、プロジェクト概要の説明を受けた後 に、要求を整理し、新しい手法やアイデアが 実現出来るのかを考えていきます。隈氏との マルセイユの場合も同様でした。建築家と討 論しながら形づくっていく手法であり、一方的 な要求に応える訳ではありません。そうやって、



2013年にオープンしたマルセイユ現代美術センター。隈研吾建築都市設計事務所の設計による建築の外壁ガラ スを AEB が手掛けた。隈氏の「都市と建物の輪郭、そして建物の内外の境界が曖昧な建築」というコンセプトに 対して、ガラスに白いエナメルの液体を垂らし、透明なガラスの一部に不透明な層をつくることで、ガラスそのも のの素材感や存在感を曖昧にする表現でバロワ氏が応えた(写真提供/AEB)

その建築にとって唯一無二の表現を目指しま す。

プロジェクトが進行していく過程で、いくつ かに案を絞っていくということでしょうか? ええ。一つの案が最後まで直線的に完成する ことはありません。まして、ガラスの持つ可 能性は無限で、その表現というのはとても奥 深い世界なのです。我々はガラスが持つ可能 性のうち、まだ20%ほどにしか到達していな いと考えています。また、ガラスの表現にお いては、単に新しいことを提案するのではなく、 プロジェクトに適した意味のある提案が求め られます。我々も日々、新しい発見に驚きます。 しかし一方で、納期、予算などの諸条件によ り案は絞り込まれていき、そこから抽出され た最適な案を建築家と検討していくのです。

プロジェクト依頼の有無とは関係なく、建築 家にアプローチすることもあるのですか?

そうですね。作風を理解し共感できると思う 建築家に連絡を取り、プレゼンテーションを 行うことはあります。また、エキシビション などの発表の場で交流が始まる場合もあります。 例えば今年の「デザイナーズ・デイズ」に出 展した作品 「編んだガラス」 (次頁・右下)には、 フランス国内で多くの美術館設計を手掛ける ロラン・ボデュアン氏が関心を寄せてくれま した。その時考えていたアイデアを彼に話し たところ、私の表現方法をぜひプロジェクト に取り入れたいと言われました。

どんな建築家に共感することが多いですか?

ピーター・ツムトア氏の作風には、我々のノ ウハウが提供できると感じています。隈氏の 工芸的な手法や素材を重視する作風にも、関 心と共感を覚えずにはいられません。日本人 建築家には共感する部分が多いですね。いず れにせよ、理屈ではなく私の感受性が基準に なっていると思います。

日本でのプロジェクトについて聞かせて下さい 2011年に竹山聖氏と「柏の葉 147コモンプ ロジェクト」でコラボレーションしました。 千葉県の柏市にある、カフェや音楽ホール、 保育園などからなる複合施設のプロジェクト で、この中の保育園の開口部に我々が制作し たガラスウオールが収められています。竹山 氏からは「子供が元気に成長するさまを、施 設の一つである音楽スタジオやそこで奏でら れる音楽と絡めて、保育園の開口部に表現で きないか」という依頼がありました。その際、 竹山氏からは音楽の音源そのものがコンセプ トと共に送られてきて、我々はそれを元に、長 短のガラス板で、音階やピアノの鍵盤を想起 させるような、カラフルなガラスウオールを 制作しました。ある面では具体的な要求も必 要ですが、こうした感覚レベルでイメージを 共有し、新しいモノをつくり上げていくよう なプロジェクトは大変刺激的です。

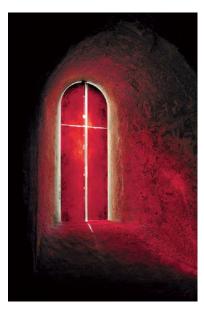
設計者たちが AEB に求めるものは何でしょ うか?

ガラスの新しい可能性への挑戦ですね。我々 は、これまで可能性の20%を開拓してきたと 自負しています。ガラスに関心が高い建築家 でも、そのわずか1%ほどの知識とノウハウで 設計をしているような状況だと思います。そ の中で誰が革新をもたらし、夢を与えていけ るでしょうか。

例えば、安藤忠雄氏はコンクリート打ち放し の技術だけでシルクのような表現を成し得て います。それは、彼の素材に対する挑戦と積 み重ねた経験によって実現されているものだ と思います。私はこうした挑戦や経験によっ てのみもたらされる、明快さやシンプルさに 興味があります。日々、工房スタッフたちと 研究を続けているのです。

もちろん、我々と同じようにガラスを扱う競 合はたくさんいます。しかしアプローチや手 法が大きく異なります。数カ月前に講演をし た際、ある建築家から「他社は素材を提供す るのに対し、君たちはプロジェクトを育む存 在だ」という言葉をもらいました。他社を非 難するつもりはありませんが、こうした理解 が我々を勇気づけます。誤解を招きやすい表 現ですが、こうした違いは、オートクチュー ルとプレタポルテの違いのようなものです。 付け加えるならば、我々は建築家が採用しや すいオートクチュールのガラス表現を提供す るために、あらゆる障害を賢く乗り越えるノ ウハウを身につけました。

また、現場では頻繁に「なぜ容易な手法や解 決方法を採用しないのか?」と施工業者から 質問されます。しかし、存在しないものを求 める探究心、新たな感動の模索なくして、こ の仕事を続けていくことはできません。同じ 動作を繰り返しながらも、技法や美を磨いて いく伝統工芸職人には必ずぶつかる壁がある 事も事実です。それは、進めば進む程に、経験 を積めば積む程に大きくなっていくものなの です。



フランス・オーベルニュ地方にある村ブレルの「ブ スラルグ教会」でのプロジェクト(2005年)。十字 架部分に設置されたガラスレンズが光の屈折を生 み出し、教会の内側に、神と人間をつなぐ象徴であ る「虹」を映し出すというもの(写真提供/AEB)

ガラスを扱う職人を夢見て、人生を歩んでこ られたのでしょうか?

祖父はジャン・コクトー氏の映画舞台の装飾 家で、母はオートクチュールの世界にいまし た。少なからず彼らには影響を受けたことで しょう。私は、農学を学んだ後、フランス徴兵 制度でアフリカで生活し、戦争を眼前で見ま した。その時に撮影した写真が、後にフラン スのメディアで報道されました。後にガラス 職人のルポルタージュでガラスの世界と縁を 持ちます。その後、独学でガラスについて学 びました。技術や手法は一つの道具であって、 専らそれを取得することが目標ではありませ





左/竹山聖+アモルフ設計の「柏の葉 147コモンプロジェクト」(2011年。撮影/白鳥美雄)。近隣住民のための保育園や音楽スタジオ、カフェなどから成る複合施設の一画に AEB によるガラスウオールを設置した。竹山氏からバロワ氏に送られた「音楽」を元に、ガラスウオールをイメージしていったという 右/2013年6月にパリで開催されたデザイナーズ・ デイズ期間中の AEB の展示。「ガラス=平滑」という固定概念に対して、螺旋状のワイヤーなどの金具を用いガラスを「編む」ことで、新しい表現を試みている(写真提供/AEB)



上/AEBの工房の様子

下/FRACマルセイユに使用されたガラスパネルの制作風景。表面の白のドットは注射器でドロップさせた白のエナメル液。1700枚のパネルは、約5カ月間掛けて製作された(写真提供/AEB)

んでした。写真とガラスには「光」という共通点があります。宗教的な概念は避けてお伝えしたいのですが、精神性に導かれるのです。10年間、ステンドグラスの制作に専念し、その期間、フランス200カ所の教会の修復に携わりました。伝統は更新されるのに対し、伝統主義は閉鎖的です。修復の依頼主であるフランスのカトリック教会組織は典型的な伝統主義で、私はその固い考えに順応していけなかったのです。

そうしたことへの反感から、AEBを設立されたのでしょうか?

そうです。13世紀に建立されたシャルトル 大聖堂に関与したガラス職人たちは、技術と 並行して豊かな創造性を持ち、職業の在り方 を考えました。彼らが単に注文に応える仕事 をしていたとは思えません。工業化され、も はや建築が職人の手を離れてしまった現代に おいて、私は建築家と共に考える職人であり たいと強く思いました。逆説的ですが、その ためにはステンドグラスの世界から離れる必 要があったのです。しかし、当時工房では3 ~4名の職人を抱えていたため、それまでやっ てきたスタイルを、瞬時に新しいものに切り 替える訳にはいきませんでした。頭を悩ませ ていた頃、偶然「斜めにのびる建築」の著書 で建築家でもあるクロード・パラン氏に私の 考えを話す機会がありました。我々の新しい チャレンジについて意見を求めたところ「不 可欠な行為」と決定的な言葉をもらいました。 そして、その1カ月後には工房の生産体制を 変化させていきます。スタッフは躊躇したでしょ うが、皆ついてきて現在も同じメンバーです。 あえて困難な立場に身を置き、ガラスを使っ た表現を多角的に考えていける環境づくりを 志しました。

AEB の代表作品は?

あえて言うならば、2013年マルセイユ欧州 文化首都プロジェクトの一つである「FRAC マルセイユ」が挙げられます。およそ500万 滴のエナメルを、1本数セントの注射器でドロッ プさせた1700枚のパネルは、スタッフと5カ 月掛けた手づくりです。地元生産というビジ ネスモデルが、オリジナル品採用の実現性を 高めました。

それから、フランス中央部の村落にある12世紀の教会のステンドグラス(前頁・右上)です。 我々の転換期の作品として象徴的です。プロジェクトではクライアントから神と人間を結ぶという課題を与えられました。聖書では「虹」がそれに当たります。赤と白のガラスだけを使用し、窓枠を支える中心部の内側に、傾斜をつけてカットしたガラスレンズを挿入しました。光の屈折により、教会の中に虹が現れるのです。

これからの課題は何ですか?

フランスほど複雑な建築現場は他にはないでしょう。日本のように、免震設計や気候風土に耐久する構造計算や条件ならともかく、フランスの規制はそれ以外の条件も求めてきます。そうした条件下にあるからこそ、我々は、単なる試作やリサーチに留まらず、プロジェクトの実現性を高めていくことが重要です。我々は、建築の技術知識もあり、産業と芸術を結んでいくという大切な役割もあります。合理性や経済的な指標だけにとらわれずに、価値あるプロジェクトに専門家として貢献し、そこに携わる人々との協力関係を保っていきたいですね。

エマニュエル・バロワ

1964年フランス ヌイイ・プレザンス生まれ。AEB(アトリエ・エマニュエル・バロワ)代表。伝統的なステンドグラス制作や修復に10年間携わった後、1999年より現代建築のための特注ガラス制作に専念する。2010年、フランス政府より国家最優秀職人賞を授与

